

日本語教育における 異文化間コミュニケーション能力について

— 中国人学習者をめぐって —

About the inter-cultural communications abilities in a Japanese education

— Over the Chinese learner —

鄭 愛 莉
ZHENG Aili

キーワード

〔文化〕 culture、〔異文化間コミュニケーション〕 inter-cultural communication

〔コミュニケーション能力〕 communicative competence

はじめに

外国語教育としての日本語教育は、単に文法の知識や言語技能を獲得させるのみならず、学習者にとって異なる言語や文化を持った人たちとの相互交流を通して、日本語と日本文化に通曉し、最終的には自己のあり方を確立することを目指すことが目標である。この目標は、第1に日本語コミュニケーション能力の習得、第2に日本文化に対する共感的理解、第3に自己実現、第四に学習集団の形成（教室風土と人間関係）に分けられる^①。

筆者は、日本語教育における異文化間コミュニケーション能力については、日本語を習得し、日本人と接触し、コミュニケーションに通じることであり、それにより自文化と日本文化の違いを発見し、自らが世界に発信できるものを見出していくことだと思う。実際に接触することが、必ずしも相互理解に結びつくとは限らない。接触したために、偏見や嫌悪感が強くなることもある。しかし、接触し、互いに影響し合い、ともに問題を解決するプロセスを確立することによって真の相互理解に導かれるのだと考えたい。

文化が違うことを指摘しただけでは無意味で、その違いがどこから、どんなプロセスを経て出てきたかに思いを馳せた時に、はじめてそこから有意義な結論が引き出せる^②。

本稿では、思考経路や価値観の文化的背景の違いによる行動様式の違いや言語表現の違いを理解する際に、異文化間コミュニケーションの場面でいかに誤解や違和感を軽減し、齟齬を予期し、適切に対処できるかという能力に関して、中国人学習者を中心に日本語教育における文化理解の可能性を考察し、異文化の架け橋になれる人材を育成するための異文化間コミュニケ

ーション能力の習得方法を探りたい。

I 文化について

1 文化の概念

文化についての定義は多いが、本稿ではD.マツモト（David Matsumoto 2001）の定義を紹介したい。

「各規則におけるダイナミック（活動的）システムであり、明確なものや暗黙のうちに了解されているものがある。各集団が自らの生存のために作り上げてきたシステムで、態度、価値観、信条、規範、行動などに関連している。集団内で共有されているが、同じ集団内でもその中に存在する各单位（集団をさらに分割した下位群）ごとに異なった解釈がされている場合もある。次世代へと伝えられていき、比較的变化しにくいものではあるが、時代とともに変化する可能性もある」^③。

以上の文化についての概念の中のそれぞれの用語については、以下のように説明している^④。

①ダイナミック（活動的）について。文化が表現している行動と文化の抽象概念の間にはある程度の食い違いが必ず存在するものである。というのも主流であるものを一般的だとみなす傾向があるからである。文化は静的な存在ではなく、常にダイナミック（活動的）で変化し続けるものであるということが分かる。

②規則システムについて。文化とは行動・規則・態度・価値観など1つ1つのことを言っているのではなく、こういった構成概念をすべて集結したものである。

③集団と単位（さらに分割した下位群）について。集団に属している個々のメンバーや、またはその集団よりもさらに大きな集団に属している個々の集団の中に、文化は多様なレベルで存在している。例えば、大企業の中にはさまざまな部門や課がある。公、または暗黙のうちに了解されているものといったシステムがあり、そのシステムが企業の組織的な文化を構成している。

④生存について。各集団が確実に引き続き生存していくために、文化を構成している規則システムは存在する。集団内の各单位が互いに共存し、無秩序な状態（大きな混乱）が起こらないようにするために、こういった文化規則が社会秩序の枠組みを与えているのである。

⑤共有について。同じ集団に属している個々の人が、同じ価値観、態度、信条、規範や行動を持っていることである。これは、心理的な共有を意味しているのである。

⑥態度・価値観・信条・規範・行動について。その文化に属している「物の考え方」を共有している。こういった「物の考え方」は、個々の人間の心の中に存在しているだけではなく、個人という枠組みをこえて、社会的意識としても存在しているのである。共有している文化的価値観、規範あるがゆえに起こる日常の習慣的行動、また一般的、自動的行動のパターンに、共有している行動を見ることができる。

⑦（集団のさらに分割された下位群である）単位間における解釈の相違について。一般的に「文化」という用語は、ある集団の中の各单位において主流となっている傾向、または平均的な傾向を表現したものである。かといって、必ずしもその集団内にあるすべての単位の各側面をすべて正確に表しているわけではない。文化内における個人個人の相違を認識することは、

ステレオタイプの限界を理解する上で基本となっている。

⑧次世代へと伝えられていき、比較的变化しにくいものについて。「一時的流行」という一時的に多くの人たちに共有される場合があるが、ここでは述べない。文化とは永続性や規則性のあるシステムであり、集団内の単位が互いに共存する上で、重要になってくるものなのである。1つの世代から次の世代へと継承され、比較的变化しにくいのである。

⑨時代とともに変化する可能性について。比較的变化しにくいものである文化も、決して静的な存在ではない。文化が時代とともに変化する可能性がある。ある文化システムがその集団の主流で一般的な傾向でなくなった時、変化は避けられないものとなるのである。

以上の定義は、過去にあったほかの文化の定義に類似している点が多い。とりわけ心理的特質や特性の共有及び次世代へ文化要素を受け継ぐという点で類似している。その違いとは、個々の集団の文化について述べているだけでなく、集団の中にある各单位について述べているところである。家族の中の個人、地域社会の中の各家族、国家の中の各地方、あるいは企業内における課の中の個人、部の中の各課など、社会構造や多様なレベルの組織に存在する文化を理解することができるようになるのである。

自国の文化や母語は無意識のうちに習得するものであるもので、自国の文化圏で生活している限り、自分自身では気付かない面が多い。異文化の中に身を置いてはじめて、自分の国の言語やその文化背景を再発見することになる。

2 文化の違いに映る行動と思考経路の違いについて

中国の日系企業に勤めている中国人社員が、仕事を覚えたらすぐ辞めて、もっと待遇のよい会社に転職したり、自分の会社を設立することについてよく報道される。中国人が設立した会社は日本にも多くあるというが、そのほとんどが零細企業で、能率の悪い経営をしている。どうして合併してもっと大きくしないのかと聞くと、皆「社長になりたいから」との答えが返ってくる。中国人の考えの1つとしては、「鶏口となるも、牛後となるなかれ」の諺が影響しているからである。また、学歴社会と競争社会になっているからでもある。

日本人は逆に、学校教育から人並み意識を注ぎこまれる。学生幹部から協会の会長まで、交替で誰でもなれる。誰が総理大臣になっても日本はあまり変わらないともいえる。それだけ日本社会は、成熟している。

2003年10月31日に中国国営通信新華社が報道したニュースで、中国陝西省西安市の西北大学の中国人学生数百人が、日本人留学生らが文化祭で演じた下品な寸劇に反発し、謝罪を求めて市内をデモ行進した。日本のテレビではお笑いで下品なものが多いので、それに見慣れた日本人には何の抵抗も起こらないが、国が違えば同じ行動に対する反応が随分違ってくる。そこには違った価値観と習慣が現れていると思う。

人は、「自分の文化に存在する項目が、それ自体絶対的な、どこでも通用する価値を持っているように考えがちである」^⑤。

中国人と日本人はお互いに同じような顔をしているので、ついつい考え方もあまり違わないだろうと思いがちなのだが、同じ言葉、漢字でも別の意味、内容で使われていることがある。それは心の姿も違っているということでもある。

最近中国人と日本人の違いの研究について『中国人の愛国心——日本人とは違う5つの思考

回路』(王敏)という評論があって、中国人の心を5つのキーワードをヒントとして挙げた。「愛国」「歴史」「徳」「中華」「受容と抵抗」である^⑥。この本は中国人と日本人の間にある溝、すなわち誤解が生まれる土壌を指摘したものである。

この論述の中で、「愛国」という熟語は、中国と日本どちらも使っている。だから日本人は、自分たちが持っている「愛国」のイメージで、中国の「愛国」を考えてしまう。しかし、同じ文字だから同じことを意味しているとはいえない。

中国においては、「愛国心」は大人になるための条件であるとともに、人間にとってきわめて価値の高いものであると考えられている。ただし、中国人にとっての「愛国」という言葉の意味は、日本人が使う「愛国」とは違っている。

中国の愛国の始まりは四書五経の1つである「大学」(紀元前5世紀頃)にある言葉「修身齐家治国平天下」と考えられるようで、自分と国を大切にすることの重要性が述べられている。中国では『国を愛することは、自分を愛することでもある』と教えられる。そのため愛国心を持つことは、他人のためではなく、自分のためだという意識がとても強い。

中国の「愛国心」は長い歴史を持ち中国人の血にしみついたものだといえるし、なにも社会主義になったから「愛国心」が強調されているわけではない。ただ行き過ぎた愛国主義は中国内でも反省材料としてある。

2つ目は「徳」である。これは儒教の教えに根ざしたものである。中国では皇帝も民衆も「徳」を持たなければならない。徳のない皇帝が出現した場合、民衆には、蜂起して皇帝を交代させる権利があるとなる。中国人にとっての「徳」の位置づけを理解すれば、なぜ中国でデモ行為が多いかについて理解が進むと思う。

3つ目は「歴史」である。言葉の背景には文化がある。同じ文字を使っている、背景が違っていれば意味するものも違ってくる。「歴史」という言葉も、日中ではニュアンスが違っているのだ。中国人はよく「歴史的に見れば」という言葉を使うが、日本人は「国際的に見れば」という言い方をする。この中国人の「歴史的に見れば」は歴史を生きたものとして現在も使っているということであり、単なる教養だと思いがちな日本人とは違う。中国人にとっての「歴史」は現在進行形である。

中国人が歴史認識、歴史認識としつこく迫るのは「歴史」というものをとても重く見ているという文化的な背景による。必ずしも日本への政治的圧力のためだけに持ち出しているわけではないことは、知っておいてほしいと思う。

又、中国人は過去を水に流したりしない、日本人にはシツコイと感じられるが、これは中国人の歴史観である。と指摘している。

4つ目の「中華」について。「中華」には色々な概念があるが、日本では、「民族」という言葉と結び付けられて、中華民族中心の思想と考えられていると思う。しかし「中華」という言葉は「民族」よりも「文明」「文化」という言葉を結びつけて考えたほうが、中国国民の感覚に近いと思う。中国国民が誇りに思っているのは、民族はともかく、中華文明と文化である。

5つ目は外国文化に対する「受容と抵抗」の気持ちの二重性は、長い年月をかけて、中国人の精神構造に染み付いてしまったものであると述べた。

バンクス(1999)も指摘しているように、私たちはそれぞれ、幼年期の社会化を通じて、文化的規定を受けるわけで、自らが属するコミュニティ文化の前提となっているものを受け入れ、その価値、世界観、そして誤った考え方やステレオタイプを身につけていくわけである^⑦。

隣国同士の中国と日本であるので、互いの良さや互いの欠点を知って、つきあっていきたいものであるが、同じ客観的な事象でも国や言語が違ふと考え方のズレがあるので、お互いに理解されるとは限らない。

異文化間コミュニケーションは、現在と過去を同時に見る視点が必要となる。自文化と相手の文化の歴史的経緯に対する認識と配慮が、お互いの関係を理解する上で重要だと思う。

Ⅱ 異文化間コミュニケーションについて

異文化間コミュニケーションにおいては、文化的な存在として人が持つ矛盾した側面を同時に捉え、バランスを取る能力が求められるようになる^⑧。

1 異文化コミュニケーションの概念

コミュニケーションについての定義も多いが、ここではコミュニケーションとは「人と人の間で起こる知識、アイディア、考え、概念、感情の交換」^⑨の定義を援用する。

異文化間コミュニケーションとは異なる文化背景を持つ人と人の間で行われる知識・アイディア・考え・概念・感情の交換なのである。

人間は「言語的と非言語的」といった2種類の方法を用いて、意思疎通を図っている。言語行動や非言語行動の規則をきちんと理解することと、メッセージが正確に伝達され解釈されているかどうか重要である。

外国語でコミュニケーションをする場面は、教室においても想定されるが、最終的には教室の外の異文化の相手とのコミュニケーションが想定されている。

言語行動に関与する代表的な分野だけ並べてみても、言語の文法的な知識、単語と文章の意味、文字の表記法、方言の弁別、敬語の使い分けのような言語知識、表現によって違う微妙な言語感覚、方言と形式などに対する言語意識、音声などに関する広域言語に対する感覚、ジェスチャーのような非言語行動、対話の相手と機能別場面、置かれている状況、対話関係者たちの人間関係、言語伝達メディア、話題に関する価値観、話し手と聞き手の心理、社会的倫理、伝統的習慣、宗教、思想、行動体系など、分野を特定できないほど多くの分野が言語行動に深く関係している^⑩。

コミュニケーション活動の基本的な枠組みは、言語表現、場面認識、意図、判断の三者によって構成されていることが分かるが、重要なのはこれらの構成要素を話し手なり、聞き手なりがどのように把握するかである^⑪。

具体的な異文化コミュニケーション場面では自分がうまく伝達したつもりでも相手はこちらの意図したとおり受け取るとは限らない。また意図した行動も意図しない行動も相手との関係性に影響を与える。人と相互作用を開始した瞬間に印象は形成され、人格は評価される。言語能力が未熟であることは、自己表現のぎこちなさの言い訳にはなっても、相手による印象の形成や評価をとめることはできない。つまり、言語の習熟度に関わらず、個人の行動は対人関係に影響を与え続けるのである。

2 異なった言語行動と言語スタイル

中国人の学習者が初対面の日本人の女性の先生に、「先生、結婚していますか?」「恋人がいますか」とか平気で聞いた例がある。中国の学生にとっては先生のことを知りたくて、先生に対する親切さで、先生と親しくなりたい気持ちをこめているが、日本人の先生にとってはプライバシーの侵害だと思われる。学生たちの質問が教師をいらだたせ、その結果、教師は学生たちに対して悪い印象を抱き始めるかもしれない。その後、何回か同じ質問をされてから、中国の学生が平気で他人のプライバシーについて聞くのだと気づいた。人のことばは、対人関係に影響を与える。ある状況において何が慣習的に適切な行動であるかは、文化によって異なる可能性がある。

日本人はご馳走になったら翌日お礼の電話をするが、中国人はいちいちお礼を言うのは水臭いと考える。日本人は引っ越してきたらタオルか菓子、生活用品を持って隣人に挨拶をする。中国人は警戒して知らない人からはまず物を受け取らない。日本人は自分の家に工事がある時も何か生活用品を持ってきて、近隣に挨拶をする。中国ではめったにないことである。むしろ何か贈られたら嫌われる。挨拶の形はいろいろあるが、葉書での挨拶では、年賀状・暑中見舞い・喪中・就職・転勤・結婚・出産など、人生のいろいろな変化の瞬間を皆に報告している。こうした挨拶から、人間同士の親近感が生まれてくるが、中国人は単なる挨拶をするのは時間の無駄と考える。極端な話では、困っていて助けが欲しい時にやっと人に挨拶する。それぞれの場面で決まった挨拶用語があるのは便利で、日本社会の人間関係は表面上、中国よりスムーズに行くケースが多い。「以心伝心」も多いが、この場合は、言葉にして表している。中国は逆に、褒める言葉や感謝の気持ちを心に銘記して、言葉ではなく、いつかは形にする点では日本と違っている。

阿部(1999)の分析によると、日本社会で使われる決まり文句としての挨拶は、コミュニケーション回路の開閉をつかさどるに留まらず、互いの関係を「ウチ・ソト」、「上・下」、「点と線」といった人間関係によって指標する点が特徴的である。例えば、「A:おはよう/B:おはようございます」のようにやり取りには、挨拶を交わす2人の上下関係が指標されるし、「お世話になります」、「どうぞよろしく」といった挨拶には、線として続く人間関係が指標される^⑩。

語用論的な側面から見ると、例えば、「ひと言ご挨拶させていただきます」という時の「あいさつ」とは、発話のコンテキストによって「自己紹介」のことかもしれないし、「感謝」や「謝罪」の気持ちの表明かもしれない。また、「きちんとごあいさつもいたしませんで」、「あいさつもろくにできないやつ」といった表現に象徴するように、あいさつとは日本社会において人間関係を築く上で必要不可欠、かつ一人前の社会人として身につけるべきとされる行動様式なのだ^⑪。日本人同士の挨拶の慣習が上手く働いているので、摩擦を避けている。

ネウストプニー(1982)は「コミュニケーション問題」というとコミュニケーションの挫折、つまりメッセージが通じなかったり誤解されたりすることを想像する人が多い。しかし、そのようなコミュニケーション問題があることもあるが、比較的少ない。何かを言うべきところで言わなかったり、沈黙を期待された時におしゃべりをしたり、或いはリラックスするべきところでフォーマルな態度をとったり、期待された時にあいさつをしなかったり不適当に笑うような行動がコミュニケーション問題の主な根元である^⑫と述べている。

日本人は「あいまいさ」「ぼかし」の多用によって、含蓄を持たせ、婉曲に話すのを好み、「以心伝心」を重んじる国民という定評がある^⑤

一つ典型的な例は、日本語では確言・断定・断言をできるだけ避けて、あいまいな表現が相当発達しているところである。「ではないでしょうか」、「じゃないかと思えますけど」、「とも言えそうな気がします」、「受け取りかねないんじゃないかと思えるのですが」、「と言えなくもないんじゃないかというような気がします」、「いいじゃありませんかと思えますが」など婉曲な表現を多用する。

議論する場面では、「私は一応田村さんと同じです」などと言う。日本人は議論すると気まぐずになると思って、意見を述べることを控える。日本人の意識では、自他の間には対立がない。したがって、強い自己主張も強い自己否定もない。他人の意見に反対する時、中国人は、「我不同意你的意见。／あなたの意見に同意しかねる」とか、「我反对你的意见／あなたの意見に反対です」などとずばりと言う場合が多いが、日本人は「おっしゃることはよくわかりますが、この場合もありますから」とか、「確かにそういう見方もできると思いますが、私の考えとしては」とか、「お言葉を返すようですが」とか、「別に反対を唱えるわけではありませんが」とか、「おっしゃるとおりかと思えますが」とか、「御説ごもっともとは思いますが」など、個人の自己主張より全体の融和が大切だと考えるようだ。中国人は物事を率直に表現し、直接的断定的な表現形式を用いるが、日本人は、相手の気持ちを悪くさせるような硬い感じの表現を避け、相手に刺激を与える明快な断定表現をあまり喜ばないため、穏やかでやさしい言い回しで表現し、婉曲な表現形式を用いる場合が多い。物事を肯定する時、中国人は、「是／そうです」とか反対する場合ははっきりと「反対する」の意見を出して、曖昧な態度が嫌われる。

中国人学習者の誤用例の1つであるが。学生が先生に「先生、映画のチケットがありますが、見たいですか」。「…したい」は中国語の「你想…」をそのまま日本語に訳したのであるが、人間関係の「上下」関係の意識が弱いからである。

ある日本人学生が中国人留学生に「明日どこかへ遊びに行こうよ」と誘ったとする。ある中国人学生は自分の都合が悪ければ、「我不去」（私は行かない）とストレートに言った。しかし、この返事に日本人学生は気を悪くする。日本ではこうした場合は、たとえ行きたくなくても、「それは嬉しいなあ、だけど明日はちょっと……」と婉曲に受け答えするものと相場が決まっているからである。断りをズバリと言わないのが一種のエチケットなので、それをしない中国人学生は日本人学生から礼儀知らずと不快がられる。他方、中国人学生にすれば、「行かない」とはっきり答えて何が悪いとなり、結局、両者の溝は埋まらなくなる。

「すべてのコミュニケーション行動が、実質的な行動に基盤をもっているのである。実質行動は明らかに一次的で、コミュニケーション行動は二次的な道具に過ぎない」^⑥。日常生活の行動、経済、政治、思想行動である実質行動（社会文化行動）と言語（文法）行動、さらにどこで、何を、どう言う（聞く、書く、読む）かという文法外のコミュニケーション行動（社会言語行動）が文化行動に含まれるとしている^⑦。

異文化接触場面においては、個人が内面化した深層文化（価値観や信念体系）を理解し、行動解釈の齟齬や意味の共有の難しさなどを乗り越えるには、その文化の人々が歴史的に継承してきた価値観や行動の基準、認知的枠組みを理解することが必要とする。

Ⅲ 異文化コミュニケーション能力について

以上述べたように、日本人の文化・社会背景には「人間関係や意見の対立を優先する」、「相手の話を察しながら聞く」、「上下関係を重視しそれぞれ立場をわきまえる」があるが^⑨、中国人の行動様式といくつか違ったところがある。日本語を習得する過程で、いくら日本語が流暢に話せても、日本文化や言語的要素の奥に潜む非言語的要素や文化的な背景に意識しなければ、バランスの悪い学習となるであろう。話し手と聞き手のコミュニケーションは、言葉と言葉以外の物理的・社会的・心理的・時間的・空間的など、さまざまな要因によって成立するのだからである。

1 異文化コミュニケーション能力の要素と目標

異文化間の相互のコミュニケーション能力とは、異なる文化的状況で効果的に意思を疎通できる能力のことをいう。

グディクンスト (Gudykunst) は、3つの主な構成要因を主張した^⑩。(1) 動機的要因 (2) 知識的要因 (3) スキル (技能) であるが、動機的要因とは、「コミュニケーションを行っている人たちの必要性」「お互いの持っている魅力」「社会的結合」「自己像」「新しい情報に対する寛大さ」などである。知識的要因とは「期待」「共有ネットワーク」「多様にものを見ることができる知識」「異なった解釈ができる知識」「類似と相違の知識」などである。スキルの要因としては「共感する能力」「曖昧さを容認する能力」「コミュニケーションに適応する能力」「新しい分類を作ることのできる能力」「行動を受け入れることのできる能力」「適切な情報を収集する能力」などである。

また、マーティンとハマー (Martin & Hammer, 1989) が行なったアメリカ人学生の仮想状態のもとでの相互作用の研究では、「コミュニケーション機能」「非言語」「状況」「会話管理」といった4種類の要因およびスキル (技能) があることを発見した^⑪。

コミュニケーションスキルとは対人関係を円滑に進める技術を指す。「相手の信頼を得る技術」ともいえる。コミュニケーションには「読む」「書く」「話す」「聞く」があるが、「コミュニケーションスキル」においては、「話す」「聞く」といった電話や対面で行われるリアルタイムでのコミュニケーション技術を指していることが多い。「聞く」では、相手が言っていることを理解するのは前提条件だが、相手が口に出してない感情や思考をうまく推測できることが求められる。「空気を読む」と言われたりもする。また「話す」では、一方的に自分の話したいことだけを話すのではなく、相手の要求を的確に把握し、提供することが求められる。相手が直接言った要求に応えるのは誰にでもできることで、「聞く」で触れたように、相手が言語化してない要求を把握することが特に重要である^⑫。

会話のスタイルにより、ことばで表現されないメタメッセージが伝えられ、それが自分の文化で予測されることを土台として解釈される。話し手と聞き手が文化・社会背景を共有しているとメタメッセージが正確に伝わりやすく心地よい会話となるが、異文化間や異言語間のコミュニケーションではそれがあまり共有されていない部分がある。

2007年12月29日配信 産経新聞によるニュースであるが^⑬、「北京の人民大会堂で28日行われた福田康夫首相と温家宝中国首相の首脳会談。直後の共同記者会見で『台湾独立』に対する表

現をめぐり、福田首相が顔色を変える一幕があった。『(独立を) 支持しない』という表現を、通訳が『独立反対を声明した』と強い表現に『誤訳』したためだ。会見中に、すぐ資料を取り寄せた福田首相は自らの発言が『支持しない』だったと改めて説明するはめになったが、台湾問題の微妙さが改めて浮き彫りになった瞬間だった。」

外務省の佐々江賢一郎アジア大洋州局長は、記者団に「『支持しない』と『反対』とはニュアンスが異なる。強度に違いがあることは日本人なら理解できるだろう」と話した。

「支持しない」と言ったが、「反対する」と自己主張の強い言葉を避けている。もしその通訳がわざと強い口調で通訳したのでなければ、日本人は国際舞台でも日本式の行動様式と会話スタイルをとっていることと関係しているのだと思う。

2 異文化コミュニケーション能力の向上

私たちが異文化と十分に付き合うことができるようになるためには、最終的には二重文化能力(biculturalism)あるいは多重文化能力(multiculturalism)が必要である。ネウストプニーは『外国人とのコミュニケーション』において、自分の文化を保持した上で、新しい文化のルールを習得すべきであるとして二重文化能力の育成を提唱した²³。

この能力を習得して目標を実現させるには、相手国に関する情報、価値観や態度、考え方を十分理解し、それに慣れるようにしなければならない。必要な言語能力以外に、相手国の社会的、文化的背景に基づいた「正しい」行動様式を身につける能力が必要である。似ているという勝手な想定ではなく、旅行・ビジネス・ホームステイなどを通して、異文化を体験し、お互いの違いを十分理解する。日本語を上達させると同時に知識を広め、カルチャーショックにより生じるフラストレーションに対しても、また、自国の文化に関する理解と文化的先入観から生じる問題に対する理解を深めることも求められる。自分の考えと解釈に知識とスキルを合わせたもの、プラス開放性と柔軟性を付け加えること、また意思の疎通を効果的に図り、よりよい人間関係を築きあげるといった動機を持つことは効果的なコミュニケーションに導く。それと同時に、外国語を習得することは異文化を体験することになるという心構えも必要である。

終わりに

日本語を習得して、日本で生活するなら、「郷に入っては郷に従え」で、日本という環境にもっと順応するよう要求される。摩擦と誤解は不可避なものとなるのである。こうした摩擦や誤解といった障害を克服する過程は異文化を理解する過程である。しかし、日本語は一種の道具でコミュニケーションの手段になる場合、お互いが影響されることになるのである。一方的にすべて日本人の行動様式に従うのではなく、お互いに知識・アイディア・考え・概念・感情の交換の目的を実現させるには、互いに相手の文化、行動様式、生活習慣、会話のスタイルを理解し合う必要がある。そのために、日本語を習得するついでに、中国の文化や中国人の言語行動を日本人に知ってもらう必要がある。こうすることによって、本当の意味での相互理解が深まると思う。

注

- ① 縫部義憲 (2001)、「異文化コミュニケーションとしての日本語教授法」編者 飛田良文、日本語教育学シリーズ第1巻『異文化接触論』おうふう、pp.137-173。
- ② 岡崎恒夫 (2005)、「外国で教える日本文化」編著者 水島裕雅『講座・日本語教育学』第一巻 スリーエーネットワーク、p.53参照。
- ③ D.マツモト (2001)、南朝彦・佐藤公代 監訳『文化と心理学』北大路書房、p.27。
- ④ 前掲書の文化に対する概念のまとめ。
- ⑤ 鈴木孝夫 (1973)、『ことばと文化』岩波新書、p.4。
- ⑥ 王敏 (2005)、『中国人の愛国心——日本人とは違う5つの思考回路』PHP新書、pp.20-27。
- ⑦ D.マツモト (2001)、前掲書、p.190参照。
- ⑧ 八島智子 (2004)、『外国語コミュニケーションの情意と動機』関西大学出版部、p.144参照。
- ⑨ D.マツモト (2001)、前掲書、p.190。
- ⑩ 李奉徳 (2003)、「異文化理解教育の範疇と方向」編著者 宮崎里司『接触場面と日本語教育』明治書院、pp.45-56。
- ⑪ 細川英雄 (2002)、『日本語教育は何をめざすか』明石書店、p.92参照。
- ⑫ 阿部圭子 (1999)、「日本の挨拶ことばの輪郭—『ウチ、ソト』『上下』『男女差』『点と線』からの視点」『国文学』44 (6)、pp.98-103参照。
- ⑬ 井出里咲子 (2005)、「スモールトークとあいさつ—会話の潤滑油を超えて」編著者 井出祥子『異文化とコミュニケーション』ひつじ書房、p.208参照。
- ⑭ J.V.ネウストプニー (1982)、『外国人とのコミュニケーション』岩波書店、P.54参照。
- ⑮ 劉徳有 (2006)、『日本語と中国語』講談社、P.43参照。
- ⑯ J.ネウストプニー (1995)、「文化を教えるということ」『新しい日本語教育のために』大修館書店、p.47参照。
- ⑰ J.ネウストプニー (1995)、前掲書、p.42参照。
- ⑱ 重光由加 (2005)、「何を心地よいと感じるか—会話のスタイルと異文化コミュニケーション」『講座社会言語科学 I 編著者 井出祥子 異文化とコミュニケーション』ひつじ書房、p.235参照。
- ⑲ D.マツモト (2001)、前掲書、pp.207-208参照。
- ㉑ 同上。
- ㉒ <http://d.hatena.ne.jp/keyword/%A5%B3%A5%DF%A5%E5%A5%CB%A5%B1%A1%BC%A5%B7%A5%E7%A5%F3%A5%B9%A5%AD%A5%EB> (2008年1月8日閲覧)。
- ㉓ <http://mamono.2ch.net/test/read.cgi/newsplus/1198940984/201-300> (2007年12月31日閲覧)。
- ㉔ J.V.ネウストプニー (1982)、『外国人とのコミュニケーション』岩波書店、1982年、pp.150-164参照。

参考文献

- 王敏（2005）『中国人の愛国心——日本人とは違う5つの思考回路』、PHP新書。
- 井出祥子（2005）平賀正子 講座社会言語科学 I、『異文化とコミュニケーション』、ひつじ書房。
- D.マツモト著，南朝彦・佐藤公代 監訳，（2001）『文化と心理学』、北大路書房。
- 石井敏・久米昭元・遠山淳（2001）『異文化コミュニケーションの理論』、有斐閣ブック。
- 飛田良文（2001）日本語教育学シリーズ 第1巻『異文化接触論』、おうふう。
- 八島智子（2004）『外国語コミュニケーションの情意と動機』、関西大学出版部。
- 細川英雄（2002）『ことばと文化を結ぶ日本語教育』、凡人社。
- ヘレン・スペンサー＝オーティエー編著、浅羽亮一監修（2004）『異文化理解の語用論』、研究社。
- J.V.ネウストプニー（1982）『外国人とのコミュニケーション』、岩波書店。